後期：アジアのキリスト教思想
Ａ．日本のキリスト教思想
１．植村正久　２．海老名弾正　３．内村鑑三　４．内村鑑三と無教会
５．京都学派とキリスト教思想
Ｂ．研究発表
Ｃ．アジアのキリスト教思想
９．韓国キリスト教　10．民衆神学　12/11　11．中国キリスト教　12/18
12．キリスト教と土着化論　13．インドのキリスト教アシュラム　1/8
14．ピエリスの解放の神学　1/15　15．インドネシアのキリスト教　1/22

Ｃ．アジアのキリスト教思想

９．韓国キリスト教

（1）東アジア・キリスト教の多様性

１．フィリピン：フィリピンは東アジアでも例外的にキリスト教が根付いている国で、いわばカトリック教国とも言える状況にある。その特徴は、伝統的な宗教文化との柔軟な関係性にある。「マニラ市内を走るタクシーやジープ改造バスのジープニーの運転手は、車の中にマリヤ像や聖画を飾りつけたりしている。日本における交通安全の祈願のように、縁起をかつぐお守りやお札に相通ずるものがある。また、家の中に祭壇に祭ったキリスト像や聖人の像に並べて、人の形をしたアニトと呼ぶ精霊の偶像が祭ってある」。（日本超教派基督教協会編『アジアとキリスト教』星雲社、151頁）――フィリピンにおけるカトリック教会の在り方は、日本における仏教と神道との関係に似ている。 阿満利麿は、日本の神仏習合を「救済の分業システム」「日常的なもの、身近なものを通して超越的なものに近づく宗教上のたくみな工夫」と解釈しているが（阿満利麿『宗教が甦るとき』毎日新聞社、63頁）、この重層構造は、東アジアの宗教文化において広範に確認できる――。この状態は、先に東アジアの宗教的伝統の重層構造と呼んだ枠組みの中で複数の宗教が相互に補完しながら共存する在り方と言えるであろう。フィリピンのキリスト教はこの重層構造に適合することによって土着化を行っているのである。

２．韓国：韓国のキリスト教は第二次世界大戦後に急激な発展を示し、現在総人口の 30%を超えるとも言われ、すでに仏教や儒教を凌ぐ勢力となっている。これに関しては、民族の苦難の歴史をキリスト教会が共有し、民族の精神的なよりどころとなったという事実が指摘されねばならないが、とくに韓国で成立した諸教派においては、フィリピンの場合と同様に、伝統的な宗教文化とのさまざまな融合が見られる――この点は韓国において生まれた教派（統一教会などのキリスト教系の新宗教を含めて）において、とくに明瞭に確認できる。韓国キリスト教は、様々な理由から多くの教派に分裂しているが、その中にはシャーマニズム、道教、仏教などの伝統的諸宗教の要素を大きく取り入れているものが見られる――。

３．中国：中国のキリスト教会は共産党政権（とくに文化大革命期）のもとで大きな苦難を経験したが、1970 年以降の政府の教会に対する態度の軟化によって、活動を再開するようになった。以前の信徒数をいまだ回復していないが、現在少なくとも日本のキリスト教に匹敵する信仰者が存在していると思われる。現在の中国キリスト教の特徴は、共産党政権の弾圧下で成立した「家の教会」（地下教会）の存在である――中国の「家の教会」については、 レイモンド・フン編『中国の家の教会』（新教出版社）、丁光訓ほか『中国のキリスト者はかく信ず』（〃）を参照――。これは中国における新しいキリスト教の可能性を示すものである。

４．日本：中国の場合と同様に、日本のキリスト教会も大きな壁に直面している（総人口の 1%程度の低迷）。江戸幕府の鎖国政策に遡る上からの宣教活動に対する様々な圧力は、明治以降も天皇制国家形成の政策によって継続され、キリスト教は日本の近代化に対する一定の影響（教育、医療、福祉など）を及ぼしてはいるものの、結局日本の宗教的状況へ

の積極的関与には成功していない。
５．台湾：台湾は、高地人、台湾人（12 世紀以降の中国大陸からの移民)、中国人（国民党政府の移転に伴う移住者）の三者からなる複雑な社会構造を有しているが、それに対応してキリスト教会の宣教は複雑な政治状況の中で進められている。しかし、宣教活動は着実に進み、現在人口の 10%ほどの信仰者が存在する。
６．東アジアのキリスト教の現状はきわめて多様である。しかし、これらの国々の中でもとくに地理的に隣接し宗教的伝統においてもきわめて類似性の強い韓国と日本におけるキリスト教の状況の著しい相違は印象的である。中国・台湾はキリスト教の浸透に関して、韓国と日本の中間的な状況にあると言えよう。

（２）日本と韓国のキリスト教の比較

1) 日本のキリスト教と近代化

７．日本キリスト教の歴史と現状：「都市型宗教」という特徴。キリスト教が地中海世界へ伝播するようになったかなりの初期段階からキリスト教が都市(とくにヘレニズム都市)の知的環境に適合した宗教形態を発展させてきたこと、つまりキリスト教自体が都市型宗教という性格を有していることを考慮しても、日本におけるキリスト教は著しく都市型である。

都市の知識人階層を中心に日本社会に浸透してきたこと。宣教師を派遣してきた宣教母体の戦略（例えば、カトリック教会の場合）や初期のキリスト教への改宗者において旧武士階級が大きな位置を占めていたことなど。

都市の知識人階層を主なターゲットとしたキリスト教宣教は、日本のキリスト教徒を信仰内容の知的理解を欲求する点で世界的な水準に押し上げると同時に、民衆レベルでの浸透を困難にし、現在に至る日本のキリスト教の停滞を帰結したと言える。
８．都市型のキリスト教という特徴は、明治以降の近代化政策への積極的関与、つまり上からの近代への同意を容易なものとした。
「日露戦争に対するキリスト教界の協力は、日清戦争のときとほぼ同様であった。その大体の世論はこの戦争を東洋平和のため、ロシアの勢力拡大に対して国益を護るため、さらには頑迷なロシアをこらしめるための戦争といって、これを擁護し、義勇奉公の精神で国難にあたるべきことを説いた」（土肥、1980、212)。日清戦争においては義戦論を説きながらも日露戦争では非戦論を唱えて戦争反対を叫んだ内村鑑三はむしろ例外的であって、政府の近代化政策への無批判な協力という態度は、キリスト教内部から朝鮮半島の植民地政策、そして第二次世界大戦へ協力するという方向性を生み出すことになった――金文吉『近代日本キリスト教と朝鮮　海老名弾正の思想と行動』(明石書店)、1998年―――。
↓
近代化政策への積極的関与＝日本の伝統文化との全面的対決の放棄（これは裏返して言えば、伝統文化への徹底した関わり合いの放棄でもある)。
９．明治以降の近代化が天皇制あるいは民族主義という一見伝統的であることを装い、広義の宗教（意味根拠）として機能したことを考えれば、キリスト教が日本の近代化への積極的関与を通して日本の精神文化へ浸透することを試みる場合、それは天皇制イデオロギーと明治期に強化された民族主義という競合相手との全面的対決を避けて通ることはできなかったが、現実に日本キリスト教がとった道は、明治政府の近代化政策を肯定し、日本の伝統的な宗教性との対決を回避するものであった。この近代化をめぐる中途半端な姿勢（近代化を否定するのでもなく、近代化の真の意味根拠として登場するのでもなく）が、日本におけるキリスト教の現状を規定している。

2）韓国のキリスト教と近代化

「王朝が亡びる一九一〇年頃のプロテスタント教会は、芽ばえてやっと二十数年という幼いものであった。しかし朝鮮キリスト教の性格は、すでにこの初期に形成されていたと見られる」(柳東植『韓国のキリスト教』東京大学出版会、1987年、51頁)。

・「ハングルの宗教」 「ブフッフェ（復興会）の宗教」 「民族主義の宗教」

10．民族宗教としてのキリスト教

「韓国教会は迫害のなかで成長してきた教会といえます」（李、1987、98）。この殉教とともに成長した韓国教会。日本の植民地支配による韓国民衆の苦難の歴史に重ね合わされる。1903（～ 1908）年の韓国最初のリバイバル運動（信仰覚醒運動）は聖書研究と祈祷を中心としていたが、それは 1905 年の韓国保護条約から 1910 年の日韓併合と総督府の設置という歴史的状況の中で展開された。1913 年の三・一独立運動にはその中心的な担い手として多くのキリスト教徒が参加していた。

「キリスト教は朝鮮では民俗宗教のような特徴を持ち、民族の自由、独立の推進力となった」（土肥、1980、317）。日本の植民地体制への抵抗運動に積極的に参与しそこで苦難を共にすることによって、朝鮮民衆の教会に対する「共同体意識（民族共同体意識）」が生み出され、民族の宗教として認知されるに至ったのである。

「教会だけは韓国語で讃美歌を歌い、韓国語で説教をし、韓国語で祈る事が出来ました。教会は説教ばかりでなく民族意識を啓発し、愛国心を鼓吹しました。光明なき時代の光であり、生きた言葉、生命でした。教会は愛国団体になったのです」（李、1987、99）。

↓

こうした民族精神との密接な関わりは、第二次世界大戦後の民主化の過程で教会が大きな役割を担ったことでさらに深められ、現在の韓国キリスト教の基盤となっている。

11．東アジアのキリスト教の抱える問題点：東アジアの伝統的宗教文化とキリスト教との異質性。しかし、ある宗教が別の伝統を有する文化圏に根づきうるかという問いに対して重要なことは、異質であるか同質であるかではなく、その宗教がその文化圏における新しい社会システムの形成に対してどんな寄与を行い得たかにある。

「韓国の民族主義の攻撃目標が日本であっただけに、韓国のキリスト教はナショナリズムに迎合するという姿勢をもって発展してきた」。「キリスト教が、独立と開化を求める人々の革命的なイデオロギーとして採用されようとしたのである。……韓国の教会は、そのナショナリズムによって民衆の間に広まって行った」（池、1970、90,186）。

12．韓国教会における敬虔主義的傾向

・李大栄：韓国教会成長の特徴として、家族的連帯関係に基礎をおいた韓国社会において「韓国教会は家庭集会として始まった」、「韓国教会は聖書を学ぶのに熱心です。信徒は聖書を精読して、その聖書のみ言通りに生活しようと努めました」、「韓国教会は、初期の教会から早朝祈祷会をする教会として知られています」、個人伝道に熱心で「受けた救援の喜びを、他の人々にも伝えなければならないという使命感に燃えている」などの点を挙げている（李、1987、101］）。

↓

こうした特徴については、これらが先に見た日本のキリスト教における都市型宗教という性格とは対照的なものである。

家族共同体を基礎にし、聖書と祈祷を中心とした生活の確立という特徴は、一見すると素朴な信仰形態に見えるかもしれないが、それは知的な側面に偏重した信仰よりもはるかに持続性と波及性に富むものなのである。

13．「韓国教会は、一八九〇年頃から一九三〇年頃まで、国民的な開化運動の中心であった。政治的行動においても中心的な役割を果たした。しかし、日本の統治によって国家や社会との関係を断ち切られ、精神的にも従属を強いられるや、信仰と教会を維持する道はほとんど敬虔主義的なものであったと言わざるをえない」（池、1970、164］）、「敬虔主義的な信仰は、意識的にしろ無意識にしろ、そのような逆境において自己を維持するために取られた信仰形態であるという意味をもつ」（ibid.、163）。

日本キリスト教と対比される敬虔主義的傾向もまた、近代化が日本の植民地化という負の状況下で行われざるを得なかったという韓国の歴史的運命と密接に関わっている。

（3）まとめ

14. 日本のキリスト教と韓国のキリスト教とは、共に一九世紀の近代化という歴史的文脈に規定され、天皇制ファシズムと日本の民族主義とによって苦しめられたという点で、同質の経験を有している。しかし、日本の明治政府の近代化政策を肯定しつつもその意味根拠とはなり得なかった日本のキリスト教と、日本の植民地政策に抗しつつ民族の精神性の拠り所となり、近代化の意味根拠としての機能を果たし得た韓国のキリスト教との相違、この近代化の運命へのコミットメントの相違が、現在の両国におけるキリスト教会の著しい違いを生み出している。

15. 民族主義との関わりという点で、日本と韓国のキリスト教は著しい対照をなしているが、この相違を超えてさらに注目すべきことは、結局両国のキリスト教が民族主義と自らの関係性の理解を十分に深めていないという点である。それは、民族主義あるいは伝統的文化との徹底的な対決の欠如となって現れている。

・韓国：歴史的運命がキリスト教と民族主義との密接な結びつきを要求し、キリスト教の民族主義との同化あるいは伝統文化との融合という傾向を生み出した。これがこの数十年の韓国キリスト教会の発展の基盤となっていることは先に指摘した通りである。その点で、韓国のキリスト教会はフィリピンのキリスト教と類似している。しかし、ここに、民族主義に対して有効な批判を行うことの困難さが生じる。

・日本では伝統的な宗教文化との相違を強調することによって、伝統との対決を回避する傾向が見られる。とくに、第二次世界大戦以降のキリスト教会は、戦前の反省あるいは反動から、民族主義や伝統文化への強い反感によって規定されてきたように思われる。伝統文化との距離は場合によっては伝統批判を可能にするかもしれないが、宗教文化や民族主義への責任あるコミットメントなしの異質性の強調は、結局無責任な表面的な批判に終わる。

＜参考文献＞

１．池明観『アジア宗教と福音の論理』新教出版社、1970年。

２．土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。

３．河部利夫「アジア共同体への展望とキリスト教の役割」（日本超教派基督教協会編『アジアとキリスト教』星雲社、1987年）。

４．李大栄「宣教百年を迎える韓国教会の現状と未来」（日本超教派基督教協会編『アジアとキリスト教』星雲社、1987年）。

５．Myung Keun Choi, *Changes in Korean Socirty between 1884--1910 as a Result of the Introduction of Christianity,* Peter Lang, 1997.

６．澤正彦「第三節　韓国」（日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』1991年）

７．Werner Ustrof, Toshiko Murayama（eds.）, *Identity and Marginality. Rethinking Christianity in North East Asia*, Peter Lang, 2000.

８．富坂キリスト教センター編『鼓動する東アジアのキリスト教――宣教と神学の展望』新教出版社、2001年。

９．宮嶋博史ほか編『植民地近代の視座――朝鮮と日本』岩波書店、2004年。

10．徐正敏『日韓キリスト教関係史研究』日本キリスト教団出版局、2009年。
『韓国キリスト教史概論――その出会いと葛藤』かんよう出版、2012年。

11．洪伊杓「韓国プロテスタント・キリスト教史の叙述方法論的考察――諸史観の比較分析と研究方法を中心に」（現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第11号、2013年、77-93頁）